
仮面ライダークロッカー～始まりの物語～

sinne-キヨノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダークロッカーリー始まりの物語

【Zコード】

Z0459Z

【作者名】

sinne -キヨノリ

【あらすじ】

この世界は、平和な筈だった。ある日突然、不思議な者達がその平和な筈だった世界を脅かす。其処に現れたのは、クロッカスと時計を模した仮面ライダークロッカーリー。^{*}これは仮面ライダーを基にした全オリジナル小説です。苦手な方はすぐに逃げたほうが良いです。

1話「出会い、始まり、青年の変身」（前書き）

ララ「前書きとあとがきだけで登場します！鈴海ララで～す」

ルル「同じく鈴海ルル」

ララ「じゃ、今回は完全オリジナルだよ～」

ルル「他のsinne執筆小説に特別ゲストとして出ていくりじこ」

「話「出会い、始まり、青年の変身」

「は〜」

青年が居た。

青年の名前は下樹雪人。
しもきゆきと

F・Tという花屋で働く青年だ。

彼が溜息をついてる理由は、今月の食費諸々についてだった。

「何で、こんな風になるんだ〜。。。俺って、結構金遣い荒かつたつけな〜」

自分の所持金を見てもう一度溜息をつく雪人。

「バイト。。。増やそつかな。。。」

仕事をすでに結構している雪人にとっては、もう自分の為に使う時間は少なくなつて来ている。

それでも自分の生活費だけは稼がなければいけない。

「あ、雪人くん！」

「あ、薔薇さん」

彼女は薔薇花苗。
つぼみかなえ F・Tの若き店長である。

「だから、雪人君。花苗って呼んでつて言つたでしょ。で、どうしたの?こんな所で呆然として」

「いや～。生活費が厳しくなって……」

「また！？雪人君は、金遣いが荒いのよ。もひ。はー

「え？」

花苗は雪人に手を差し出した。

「今日くらいは私が奢つてあげる。結構お世話をなつてもらしね

「・・・ありがとな～！～薔さん～！」

「だから花苗つて呼んで！」

「はいはい」

「はあ・・・はあ・・・」

少年が走っていた。

「見つけた。こっちに来い！」

「誰だ・・・」

「覚えてないのか。なら、力づくで捕まえるしかないか

「はあ・・・はあ・・・」

少年は、追つてくる者に追いつかれないよう、全力で走る。

* * * * *

「あ～、良かつたあ、もう、本当に今月ピンチだつたんだよ。ありがとな、薔さん」

「だから、花苗って呼んでって言つてるでしょ。じゃあね。雪人君」

そう言って、花苗は帰つて行つた。

「ふう。良かつた良かつた。ん?」

雪人はあるモノを見つけて。

「君は・・・」

それは、少年だった。

「どうしたんだ？君は

「ぼくは、クキル。お兄ちゃんは？」

「俺は下樹雪人。で、どうして此処でこんな事してるんだ？」

雪人はクキルと名乗った少年に尋ねる。

「ぼくは、何でだろう？ 何だか、追われてるみたいなんだ。ねえ、雪人お兄ちゃん。ぼくを連れてってくれる？」

自分がよく分かつてないように言つクキルに対し、雪人は

「分かつた。でも、俺に着いてきてもあまり養えないと？」

「どうでもいい。ただ、あいつらから守つてくれれば良いから」

「分かつた。じゃ、付いて来な」

「うん」

雪人はクキルを連れて家に帰る。

「これが、クロツカーの資格者……」

クキルは、雪人に気付かれない様に呟いた。

その近くでは、不思議な少女と少年が居た。

「ねえ、アレク。あれが、クキルなの？」

「そちらしいわ……。コトト。もう少し、彼を偵察してみるわ。
それと、あの雪人という青年についても」

「分かつた」

「ねえ~、雪人お兄ちゃん」

「何だ？あと、俺の事は雪人って呼んでくれ、何だか変な感じがするつて言うか、悲しくなるんだ」

「…………うん、分かった。雪人。ねえ、此処が、雪人の家？」

「ああ、クキル」

「何？」

雪人はクキルに訊く。

「本当に俺でよかつたのか？」

「うん。雪人じやないと駄目だから」

クキルは、雪人に妙な執着を持っている。
それは出会ったときから既に分かる。

その時

「ううつ！」

「どうした、クキル」

「何だか・・・西の方向から、悪寒がする。何か、怪物が暴れいるみたいだ！」

「怪物・・・」

いきなり苦しみだしたクキルに、雪人は疑問に思う。

「雪人・・・付いてきて！」

「え？ あ、 ああ？」

クキルは突然雪人の手を握ったかと思うと、雪人の手を引いて走つて行つた。

「ふふふ・・・。丁度良かつたわね」

「モノの破壊衝動を吸い取り、何かを怪物にする。これは、ブレイクモンスターとでも言つておく? アレク

「そうね」

先程の少年と少女が石の怪物を引き連れている。

「あら、 そちらから来ててくれたようね」

其処には、クキルと雪人が居た。

「クキル、 一体何なんだ」

「雪人。 これを使って！」

クキルが雪人に渡したのは時計。クロツカスの紋様が彫られている。

「それは！」

少女・・・アレクが驚いたように言つ。

「これは、何だ？」

「クロックベルト。これでクロッカーに変身して！」

「・・・」

「お願ひ！」

必死で言つクロキルに雪人は心を打たれ、受け取つていた。

「分かつた。必死に言つ願い事は、叶えてやらなきゃな。じゃ、行くぞ」

雪人は、クロックベルトの鎖を腰に巻きつける。
そして、時計部分を開けて言つた。

「変身」

其処には、クロックカスと時計を模した者に変身していた。

「仮面ライダークロックカー。か」

アレクは、そう言い放つた。

「成る程、なら、行かせて貰うー。」

続く

1話「出合い、始まり、青年の変身」（後書き）

てわけで、またはじめてしまった・・・。
何だか次々とはじめてしまう・・・。
もうそろそろ何か終わらせなきや？（全部大して進んでない）

2話「クキル、雪人、青年の初陣」（前書き）

カズマ「今回のあらすじは俺達です」

シンジ「何で……？」

カズマ「まあ良いだろ、これの本編ではまず出ないんだしさ

シンジ「ま、いつか。前回の出来事

カズマ「

青年、下樹雪人は生活費に困る普通の花屋店員。

ある日、勤務先の店長との食事の後、クキルという少年と出会つ。そして、悪寒がすると言つたクキルに、雪人は付いていった。

そしたら、ブレイクモンスターという怪物が暴れていた。

雪人は、クキルに渡されたクロックベルトを使って変身。

仮面ライダークロックカス……じゃなくて、仮面ライダークロックカ
ーになつた！

「

シンジ「カズマ……」

カズマ「いや……つい、な

2話「クキル、雪人、青年の初陣」

「仮面ライダークロッカーか……」

少女は言い放つた。
其処に立っているのは、クロッカスと時計を思わせるデザインの仮面ライダー。

「クロッカスか、俺の好きな花だな……まあいい、まずは、其処に怪物を倒すんだろ、クキル」

「うん、ゆきと雪人」

「よし、じゃあ、行くぞ！」

雪人・・・クロッカーはチーンソーを思わせる怪物へ立ち向かって行つた。

「それにしても、チーンソーなんて、物騒なもんだな～」

雪人は、軽々とブレイクモンスターを振り回す。

「何だアイツ！」

少女は言つ。

「アレク、だつたつけ？雪人には、これまでに居ないほどクロッカーの資質を持っている。僕には、すぐに分かつたんだ」

「・・・・・」

アレクと呼ばれた少女は、今までに無い苛立ちを見せている。
隣に居た少年・・・コトトは、アレクに

「アレク、今の僕達に勝ち目ないよ、早く行け」

「・・・悔しいけど、私達にクロッカーに立ち向かう程の力は無いわ、コトト。行きましょう」

「うん」

そう言って、二人は姿を消した。

「くそつーあいつら敵前逃亡かーまあいい、俺の相手はこっちだろー！」

クロッカーは叫びながらチヨーンソーのブレイクモンスターと戦っている。

「何か武器は無いのか！」

「武器・・・。あ、ベルトの横にある剣、そのボタンを押して！」

「分かった！」

クロッカーはクキルの言つとおりにする。

「そしたら、相手に降り下ろして！」

クロッカーはブレイクモンスターに剣を振り下ろす。

その時、ブレイクモンスターは崩れ落ち、中から人が出てきた。

・・・！」これは・・・

雪人の知り合い?

「ああ・・・・・ 桜木英樹。さくぎ ひでき俺の中学の知り合いだ」

何故、ブレイクモンスターの中には人が居たのだろうか？
雪人にはその疑問があつた。

「なあ、クキル」

雪人は変身を解いてケギルに訊いた。

何？雪人

あのフレイケモンスターって何だ? 何故中に入れる?

……それで、どうも、嫁正處でからだが、

・・・ああ、エイツも、家に連れ帰るか

「で、ブレイクモンスターって、何だ？」

此処は雪人の家。

英樹は、現在雪人の家の寝室で寝させている。

「ブレイクモンスター、つていうのは、人とかの破壊衝動を動かして人を怪物の仲に取り込む。周りのモノの破壊衝動も吸い取つて、破壊だけをする人形なんだよ」

「そんなものが・・・」

「うん、それを作るのは、破壊者・・・まあ、僕はブレイカーフて呼んでるけどね。その人達が、ブレイクモンスターを作つてるんだよ」

「なあ、何で、クキルは、其処まで知つてるんだ?」

雪人はクキルに訊いた。

「・・・分からない、僕、いつのまにか追わられてて、いつのまにかクロックベルトを持つてて、何故かその事を知つてた。でも、雪人と一緒に居れば、思い出せる気がしたんだ」

「・・・俺はな、昔空手、柔道、とか、そんな感じの格闘技やつてたんだ」

「だから、結構戦闘が出来たんだ」

「まあ、な。でも、アイツ・・・雪良が死んでから、やめたんだ。雪良が居たから、頑張っていた。アイツが居なくなつて、泣いて、泣いて、涙が枯れるまで泣いて、それで、英樹に救われたんだ。薔

さんとか、F・Tの人達にな

雪人が過去の話をするのは、クキルが初めてだつた。雪人は、今まで妹の事を思い出して悲しくなるから、とこの話をする事を拒み続けていた。

妹が居なくなつてから雪人には何も無い毎日があつた。

悲しみのどん底から雪人を助けたのは、桜木英樹と薔花苗だつた。

「ふうん・・・だから、”お兄ちゃん”つて呼ばれたくなかったんだ」

「・・・ああ・・・」

雪人は、寝室に行つた。

「英樹・・・」

「・・・雪人、此処は・・・」

「俺の家だ。お前、路上で倒れてたんだぞ」

雪人は、あえてあの事を言わず、倒れてたとだけ言つた。

「そりなのか！？いや～、それにしても、変な夢見たな～」

「変な夢？」

雪人は英樹に訊いた。

「ああ、なんか、変な少女と少年が、俺に羽を投げつけて來たんだ。

そして、気が遠くなつて怪物の中に閉じ込められて暴走してゐつて夢。ま、何か変な奴に止められたんだけどさ。何処から夢で、何処まで現実だつたんだろうな。いや、全部夢か？」

「へえ～、そんなの見る事もあるんだな～」

雪人は反応を示さないよつと言つ。

「それ、お前の悪い癖だな」

「は？」

「いや、何でもねーよ。世話になつたな。じゃ」

「あ、ああ・・・」

雪人は、英樹を見送つた。

英樹が帰つた後、クキルは言つた。

「あの英樹つて人・・・雪人がクロツカーつて知つてる・・・なん
で？」

「アイツには、昔から変な才能あるんだよ。それのせいで虐められ
た事もあつたんだ」

「ふうん」

続く

2話「クキル、雪人、青年の初陣」（後書き）

カズマ「2話も終わつたな」
シンジ「な」

カズマ「これだけ・・・なのか?」
シンジ「らしいね」

3話「雪恋、英樹、切なる願い」（前編）

今日は過去の話とか、色々があるので戦闘ないです。

3話「雪良、英樹、切なる願い」

「……ねえ、雪人」

「どうしたんだ？」

英樹^{ひげき}が帰つた後、クキルは雪人に尋ねて来た。

「英樹つて人、何か不思議な力持つてたの？」

「ああ、何だかな、超能力保持者だつたんだ」

「超能力保持者？」

「稀に居るんだよ。あまり居ないし、アイツの力は強い方だつたらな」

雪人は語る。悲しげな表情をしながら、クキルに語る。

その図は、まるで兄弟の様だつた。

「そうだな、じゃあ、最初から話すか。英樹の事も、雪良の事も」

「うん」

それは、十数年前の事だつた。

まだ小学校3年生だつた俺は、転校して来た英樹に興味を持つた。

「はじめまして、俺は桜木英樹。^{さくらぎひでき}よろしく」

浮かないような、悲しげな、堅い表情の彼が教室に入ってきたとき、俺は驚愕した。

小学校3年生にしては、大人びていた事に、俺は驚いたのだ。
最初こそは皆大歓迎した。

でも・・・

「何だよそれ！幽霊なんて居るはず無いだろ！」

「何でそれ知ってるんだよ！そ、それは誰にも言つてないことだつたのに！」

「お前・・・何者なんだよ！化け物！」

「怪物！」「化け物！」

誰も知るはずの無い事を知つていたり、道端で誰かと話したり、感情が高ぶった時に周囲のものを浮かばせたり、普通の人間では出来ない事をアイツはしていた。

無論、人間は普通じゃない存在を否定し続ける。そんな存在だ。自分達より強い何かがあると、怖い感じる心の弱い人間達は、彼の存在を否定した。

そう、先生までも、それを否定した。

「なあ、桜木」

「何だよ、お前も、俺を馬鹿にするのかよ」

「違う。俺はお前を馬鹿にするんじゃない。怖いとも思わない」

「じゃあ、何だよ」

「俺は、お前を信じる。お前も、俺を信じろ」

「だから、何だ」

「だから～ら～つ！俺とは友達になろうってさ」

英樹は、人を信じるのは、俺が初めてだと言っていた。
俺とは、ものすごく仲が良くなつた。

俺と過ごして行く内に、英樹は超能力の抑え方とかを習得していく
た。

「なあ、雪人」

「何だ？英樹」

「俺さ、強くなりたいんだ。なあ、一緒に空手しないか？」

「ああ！いいぜ！」

英樹の、強くなりたいという願い。

それは、自分の強さがほしかったからだ。

超能力じゃなく、自分自身の強さがほしいって、彼が言つていた。

でも、悲劇は起つた。

雪良が死んだのだ。

「せ・・・・・雪良・・・・」

•
•
•
•
•

眠っている雪良に、俺は手を触れた。
冷たくなっている。

—
•
•
•
•
•
•
—

「出る部屋、俺」

あ、ああ・・・」

英樹は、俺が何も言わずとも、俺の心を読んで、部屋を出た。

一
雲人

その日以降、俺は空手を辞めた。

そして、ある日の事だった

一
な
あ
雪
人

「どうしたんだ? 英樹……」

卒業だから、仕事見つけました。

「モウ・・・か・・・」

「ほりほり、君の憧れの薔薇の経営する花屋で働こうぜー。店員募集中だしね」

「あ・・・ああ・・・」

それでも、俺は気が乗らなかつた。とても大事なものがぽつかりと空いていた。

「ほり、雪人君ー。」

「薺・・・さん・・・」

「何ボケーつとしてるのー。私も誘つたじやない。F・Tで働いてくれる?つて」

「「1」めんなさい・・・」

その時、薺さんは俺の頬を叩いた。

「・・・・ー。」

「妹さん!くして、気が落ちてるのもわかるけど、いつまでもウジウジしてちゃ、何も始まらないよー。」

「薺さん・・・。俺、何か、間違つてたみたいだな。ありがとな、
薺さん」

まだ、気持ちは落ちているけど、俺は、少し元気になれた。

「俺の話は、いいまでだ」

「それで、雪人は、F・Tに入ったの?」

「ああ」

雪人は、ぼおつと空を見ていた。

クキルも、つられるように外を見ていた。

続く

3話「雪良、英樹、切なる願い」（後編）

ちなみに雪人の年齢は23歳。
薔、桜木も同じ年齢。

「うう」「ふえ~」

4話「哀、恋、姉探しの少女」（前書き）

「ララ」「ここや～」

ルル「今回の……あらすじは……僕達が……担当する……」

「

ララ「前回は早くも主人公の過去暴露…これ、連載もつのかな…？」

ルル「仕方ない、作者はちまちまと長い話書くのは苦手だから」

ララ「ああ、そうそう。つい最初の方に普通は後の方で暴露する様な物を暴露したり」

ルル「で、今回の話は、ちまちまとした話になるらしく」

ララ「前回大きい話しあつたから…？」

4話「哀、恋、姉探しの少女」

次の日

「雪人^{ゆきと}！朝だよ！」

「え？ あ、ああ！！」

クキルの声で雪人は目を覚ます。

「今何時だ！」

「今は・・・えと、10時！」

クキルの言葉に雪人はあせる。

「やべつ！ 開店時間だ！ 早く行かないと薔^{つぼみ}さんに怒られる！」

雪人の働いてるF・Tの開店時間は10時。

雪人の住んでる所から店までは10分かかるし、その前に、開店準備で30分前には行かなくてはならなかつた。

「俺は今から店に行く！ あと、明日からは8時には起^{おこ}してくれ！」

「分かつた！ 雪人」

そう言って、雪人はバイクで急いで店に行つた。

クキルはその光景を見て、「この人、本当に大丈夫かなあ・・・？」
と思いふけつっていた。

* * * * *

「で、雪人君。開店時間は何時だと思つ?」

「10時・・・です・・・」

案の定、雪人は店長の薔花苗つぼみかなえに怒られていた。

「今は、何時?」

「10時29分です」

「土下座、そしてシフトはもつときつめに、あと給料そのまま」

「ええ~!?」

薔花苗の言葉に、雪人は愕然した。

「まあまあ、薔さんも、そこまで怒らなくたって・・・」

「家は今、人手不足なの!はい、英樹君も早く仕事に戻つて!」

「・・・薔さん、すみません・・・」

「はいはい、もう分かつたから、雪人君も仕事に戻つてよし!」

「はい!」

そう言つて、雪人は持ち場に行つた。

「ここ」、F・Tは、少し広めの花屋さんだ。

様々な花を取り扱っている。季節に準じて花の種類は変わる。なるべく自然な花を取り扱っているのだ。

「さて、今日も仕事仕事」

雪人はそう言って、段ボールの中からいくつか袋を出して、ケースに並べた。

「クロッカス・・・」

雪良、せつらう彼の妹の好きだった花。
彼も、その花を好きだった。

「来年、家にも植えようかな・・・」

そう思いながら、彼は仕事をしていた。

「私を信じてください・・・」

クキルには話さなかつたが、英樹と友達になつた時、雪人はクロッカスの球根を彼に渡した。

彼が来たのはクロッカスの咲く季節ではなかつた為、球根を渡すという事になつたが、その球根に込められた意味は、『私を信じてください』その意味だつた。

クロッカスの花言葉はいくつかあるが、その中で、彼が英樹にあげる時に込めた意味はそれだつた。

「雪良・・・」

一方、クキルは一人残された部屋で、何をすれば良いか迷っていた。

「とりあえず、これを使えば、ブレイカーのレーダーになるのは分かつたんだけど・・・」

クキルは、ブレイカー等を探すレーダーを作っていた。レーダーと言つても、念力のような物で探し、その方向を指すダウンジングの様な物だつた。

「問題なのは、雪人に連絡をとる方法なんだよね。雪人の働いてるお店の場所は僕も分からなしし、着いていつたら着いて行つたで雪人に怒られるんだよね・・・はあ・・・」

レーダーを作り終えたクキルは、何をすれば良いのか分からなかつた為、外に出る事にした。
でも、外に出ればまたあいつ等に襲われるかもしれない・・・。そんな不安を感じながらも、クキルはドアを開いた。

「ふあー、やつぱり、外つて良いよね〜」

雪人に貰つていた鍵で、ドアを閉める。

「もう、冬なんだ・・・」

クキルは、逃げるのに夢中で、季節とか年なんてどうでも良かつた。それを、ゆっくり見ることが出来たのも、雪人のおかげだ。

「雪人に、感謝しないとね」

そう言いながら、クキルは歩いていた。

しばらく歩くと、道端で小さくなっている少女が居た。クキルは、困っている人は放つておけない主義な為、ついその少女の所へ行ってしまった。

「君は？」

「私？ 私は・・・忘歌。おとうが 音無おとなし、忘歌

忘歌と名乗った少女は、クキルを怯える顔で見ていた。

「こんな所で、何してるので？」

クキルは忘歌に尋ねた。

「私・・・忘歌ね、お姉ちゃんを待ってるの。哀歌お姉ちゃん」

そう言つた忘歌は、疲れたような表情だつた。

「いつから待つてるの？」

「そうだな～、結構待つてる。でも、忘歌、お姉ちゃんの事は忘れてないんだ。この花に込められた意味を、理解できたから」

そう言つて、忘歌はペンダントに彫られている勿忘草をクキルに見せた。

「勿忘草・・・私を忘れないで」

「うん、忘歌。お姉ちゃんの事忘れない。この花に誓つたんだ」

もしかして、この子のお姉ちゃんって……。

「でね、お姉ちゃん、一番最近会つた時に、ここで待つてつて、言つてたの。だから、忘歌。此处で待つてる」

この子お姉ちゃんは、きっと死んでいるんだ。

クロツカスの花の言葉の様に、ここで待つている。その少女に、クキルは哀れみさえも覚えた。

「ねえ、君は、このまま、ずっと待つつもりなの？」

「うん」

「ねえ、君は、此處で死ぬつもりなの？」

クキルは、忘歌に訊いた。

忘歌は、驚いた様に言つた。

「あれえ～？忘歌、そんな事考えてないよ。忘歌には、ちゃんとまだ会いたい人が居るんだから」

「会いたい人？」

「うん、前もね、君の様に、忘歌に声を掛けた人が居たの。その人は雪人つて人だつたんだ。優しい人だつた。だから、その人にお礼とかを言つまでは、忘歌、死ねないよ」

「雪人……」

クキルは、結構あの人も色々な事に首突っ込んでるんだなーと思つていた。

「……！」

クキルは、気配を感じた。
ブレイカーの気配を。

「どうしたの？」

「いや……、ちょっと、僕は用事があるから行つて来るー。」

「え？ うん……」

忘歌を置いて、クキルはブレイカーの気配がした方へ行つた。

* * * * *

「……！」

「英樹、どうしたんだ？」

雪人は、様子が変わつた英樹を心配する。

「何だか……前、俺が閉じ込められた奴の気配が……！」

「英樹君！ 雪人君、英樹君、どうかしたの？」

「あ、少し、具合が悪いみたいなんだ、あと、ちょっと俺は別の仕事があるから、急いで行ってくる！」

「あ、雪人君！」

薔花苗は急いで店を出て行つた雪人を呼ぶ。

だが、もう既に雪人はバイクで走つて行つた後だつた。

「雪人！」

「クキル！」

クキルは、走つて来た雪人に気付く。

クキルの目の前には、ブレイクモンスターが居た。

「雪人！これ！」

「ああ、分かつた！」

雪人は、クキルからクロックベルトを受け取り、変身した。

「変身！」

そして、雪人は、ブレイクモンスターに向かつて行つた。

「雪人・・・」

「クキル！居た！ねえ、忘歌、何か感じたよー忘歌、お姉ちゃん見

つけたよー。」

「忘歌！何してるのー！」

クキルの傍に、忘歌が来た。

「危ないよー忘歌」

「ううん、危なくない！クキルと、雪人が居てくれるもんー！」

「忘歌・・・」

壊れたように忘歌はクキルと雪人に執着する。

「クキル！忘歌、忘歌ね！」

笑いながら、忘歌は涙を流す。

「お姉ちゃんが、死んだって、知ったんだよー。」

彼女が、壊れたように笑っている理由、それは、大好きな姉の死を改めて知つたからだつた。

続く

4話「哀、恋、姉探しの少女」（後書き）

ララ「忘歌ちやん」

忘歌「ララちやん」

カズマ「何あれ、二人は知り合い?」

ルル「というより・・・オリジナル、僕達の元になったキャラクターが知り合い」

ララ「ほぼ設定変わつてないけどね」

5話「戸惑い、後悔、悲しみの少女」（前書き）

カズマ「忘歌の死亡フラグが・・・」

雪人「ああ・・・」

5話「戸惑い、後悔、悲しみの少女」

「クキル！忘歌わうかを何処かに連れて行ってやれ！コイツは俺がやるから、お前は安心して忘歌を守れ！」

「わ、分かった！忘歌、行こう！」

クキルは雪人ゆきひとの言つとおりに、忘歌の手を取り、そのまま逃げ出した。

「さて・・・コイツは、どうやってやろうか・・・」

残された雪人は、目の前のブレイクモンスターを見据える。

「クキル～、何処行くの？」

忘歌はクキルに尋ねる。

「危なくない場所！雪人に言われたの！」

クキルは、少し慌てた様子で忘歌に言つ。クキルが走つていると、薔薇花苗つばみかなえが居た。

「あ、ねえ君！」

「な、何ですか？」

花苗はクキルを引き止める。

「ねえ、さつきひょろひょろした、バイクに乗った男の人見なかつた？下樹雪人っていう人なんだけど・・・」

「あ、雪人はちょっと別の仕事はいったみたいですね」

クキルは花苗の問いに答える。

「君、雪人君の事知ってるの？」

「はい。あのあなたは・・・」

花苗は、クキルの後ろに居る忘歌を見つけて、こう言った。

「あ、音無さんの妹さん・・・。まあ、とにかく、この中は安全だから、この中に入つて」

「わ、分かりました・・・」

クキルは、花苗に言われたとおりに、店の中に入る。

「今は街で意味不明の怪物が暴れてるって話だから、店も緊急閉店してるの」

花苗は現状をクキルに説明する。

「従業員も、一人抜け出してつて、一人は倒れてるの。片方は今、仮眠室で休んでるわ」

「あの、貴方が、薔薇さんですよね？」

クキルは花苗に尋ねる。

花苗は、クキルの質問に答える。

「ええ、雪人君から聞いたの？」

「はい。とりあえず、薔薇さんは、この子の事知つてそうですが・・・」

「

クキルは、忘歌を見ながら言つた。

花苗は、少し難しい顔をして、言つた。

「ええ、あの子の死んだお姉さんと同じクラスだつたの。雪人君も、英樹君も、知つてゐるよ。尤も、雪人君の方が忘歌ちゃんと直接遊んでたりしてたの。哀歌ちゃんは、雪人君の事が好きだつたの」

「そうだつたんですか・・・」

「お姉ちゃん、死んじやつたんだ。忘歌遣して・・・」

忘歌は、ずっと泣いていたのか、目の下あたりを赤く腫らしていた。そして、乾いた笑みで、壊れたように倒れる。

「忘歌！」

「忘歌ちゃん・・・！」

忘歌は、限界だつたのだ。

姉の死んだその日から、ずっと寒い所で姉の帰りを待つっていたのだ

から。

* * * * *

卷之二

雪人は、クロツカーライドについていた機能を駆使して戦っている。

一結界の結晶！これで、街に被害は行かないはず……」「

このまま街で戦うのは駄目だと感知した雪人は、街や人に被害が行かないよう結界を張った。

「このまま戦つても、体力を消耗するだけか……これは……」

雪人が引いたのは、赤い薔薇の結晶。

△矢型の攻撃用の結晶だ

「赤い薔薇の花言葉は『私を射止めて』・・・・成る程な、だから弓矢なのか」

雪人は、赤い薔薇の結晶を使って、剣を弓矢に変形させる。

「さあ・・・いつでも来い!」

雪人は、弓矢を構える。

「弓道の経験は無いけど・・・大体は出来る！」

ターゲットに矢の先を固定し、矢を放つ。

「くつ・・・なかなかあたつてはくれないな・・・」

雪人は矢を放つていくが、中々その矢は当たらない。ブレイクモンスターはどんどん雪人に迫つていく。

「何か、別の物は無いのか！？」

結晶を探すものの、中々攻撃系の物は見つからない。

「このフォームで行くしかないか・・・」

雪人は決心をして、弓矢で相手を叩いた。

「これでも、くらつとけ！」

雪人は何本も束ねた矢をくらわせた。

ブレイクモンスターにそれは当たり、ブレイクモンスターは消滅した。

そして、そこに残つた人は・・・。

「この人・・・」

続く

5話「戸惑い、後悔、悲しみの少女」（後書き）

剣崎「今日は、俺達が次回予告の係りだ」

城戸「係りとかあつたのか！？」

剣崎「次回は、今回のブレイクモンスターの中に入っていた人物が明確になる」

天道「そして、忘歌はどうなるのか、まあ、俺には関係ないが」

城戸「天道お前は黙れ！」

剣崎「城戸、お前の方が黙つたほうが良いぞ、じゃあ、次回の楽しみにな」

城戸「ボソッ（でもあまり楽しみにしないほうが良いぞ）」

天道「城戸、聞こえてるぞ」

6話「過去、真実、新たな仮面ライダー」（前書き）

翔太郎「今日は俺達があらすじを任された」

フィリップ「前回は忘歌という少女が、クキルと一緒に薔花苗の経営してる店に逃げた」

映司「それにしても・・・英樹さんはどうなったんだろう・・・？」

弦太朗「うーつ！これからどなるのか、俺もワクワクするぜ！」

アンク「おいお前ら、ブレイクモンスターとやらに入っていた人物の謎については・・・まあいか。映司、アイスくれ」

映司「どうでもよくないだろ！あと、アイスはこれ終わってから」

アンク「チツ」

映司「そうするとあげないよ・・・」

翔太郎「ま、今回は、新しい仮面ライダーも出るみたいだな」

フィリップ「今のところ伏線があつたのは・・・」

翔太郎「それは今からの楽しみだ」

6話「過去、真実、新たな仮面ライダー」

「この人は・・・」

雪人がブレイクモンスターを倒した後に、中に閉じ込められていたのは、死んだと思われた忘歌の姉、哀歌だった。だが、その顔は白く、呼吸もしていなかつた事から、もうすでに死んでいるだろう。

「何で・・・何で、死んだ人間が・・・」

雪人は、絶句した。

死んだ人間でさえも、その怪物の餌食になると分かつたからだ。そうであれば、放置されている死体にさえも、ブレイクモンスターが這い寄る可能性があるかもしれないのだ。

その時、雪人は上方から悪寒がして、上を見上げた。其処には、以前英樹をブレイクモンスターの器にしていた二人が居た。

「見つかっちゃつたみたいだよ。コトト」

「あれ？ 残念」

「残念・・・じゃねえ！ 何だよ！ これは！」

雪人は一人に問いかける。

二人は、そんな事も分からぬのか、という風に言つ。

「何つて・・・人間だった何か」を使つただけだよ？ 十分器には

足りてたからね」

アレクは言った。

雪人は、これでも生きてた人間なのに・・・・と、人間の考え方を持つてない奴等に苛立つた。
彼等は、人間ではないという事は、雪人もすでに分かつていてる事が。

「くそつ！この人は、アイツの姉なんだよ！死んでも、大切な家族だったんだ！それを利用するつて・・・何もんなんだよ！あんたら！」

雪人は、怒りを彼らにぶつける。

「何者つて？決まってるじゃん」

「僕らは、ブレイカー。破壊する事だけが、生きる目的さ」

「だから、あんたらは、人間だったのか、どうかだよ！」

雪人は、さらに苛立つて言う。

「それは、君の想像に任せるよ。僕達も、そうそうずっとは此処に居る必要は無いんで、じゃあね。クロッカーの少年」

そう言って、二人は消えた。

雪人は、哀歌の亡骸を、見つめて、一粒、涙を流した。

「ふうん、それで、クキル君は雪人君の家に住んでるのね」

一方、忘歌とクキルは、花苗の店に居た。
英樹も、調子が良くなつたらしく、出てきていた。

「それにしても、英樹君、どうしたの？ セツキ、倒れちゃつたけど・
・ 力の誤作動？」

花苗は英樹を心配した。

「ああ、その類たぐいかもな・・・。凄まじい悪寒を感じたんだ。雪人が
行つたおかげで、少し引いたけどな」

「雪人君が？」

英樹はしまつた・・・・と思つた。

花苗は、この一連の事件を知らない。

彼女に最初からちゃんと話すか、誤魔化すかしないと、駄目だ。

「あ、えつと・・・」

困つた英樹はクキルに助けを求める。

（クキル！ お願いだ！）

（ええ！？）

「えつと・・・これはね、最初からちゃんと話すから、聞いてて。
花苗さん。あと、忘歌ちゃんも」

「うん」

「分かったの」

クキルは、ブレイカーの事、ブレイクモンスターの事を知っている限りすべて話した。

雪人の変身する、仮面ライダークロッカーの事も。

「成る程・・・クロッカー・・・もしかして!」

花苗は、何かを思い出したかのように、店の奥の方に行つた。

「これ

花苗が取り出したのは、クロッカスの紋章の入つた結晶だった。

「これは・・・何?」

クキルは花苗の出した結晶をまじまじと見つめる。

「これはね、昔、雪人君の弟から貰つた物なの」

「雪人の弟?」

「雪人に弟つて居たの?」

クキルと忘歌は訊く。

クキルは疑問に思った。雪人には、妹が居たとは聞いていたが、弟が居たなんて聞いてなかつたからだ。

それは、英樹も同じらしく、考えるよつにひつん・・・といつなる。

「これは、雪人君も忘れてる事だから・・・」

花苗は、悲しそうに話す。

昔、雪人君には、弟が居たの。

下樹利久人つていう、一つ年下の弟が。

私は、雪人君とは、小さい頃から付き合いだから、彼の事は覚えていたの。

利久人君が居なくなつたのは、英樹君が転校してくる前・・・丁度一ヶ月前だつたの。

「利久人～、利久人～」

雪人君は、利久人君と一緒にかくれんぼしてたの。
私も、一緒になつてやつてたわ。

「兄ちゃん！僕は此処だよ！ほらほら～」

利久人君は、かくれんぼをすると、いつも自分の居場所を言つちやうの。

だから、いつも利久人君は鬼になつてばかりだつたの。

この事件は、利久人君がかくれんぼの鬼になつて私や雪人君を探してたの。

「兄ちゃん～花苗姉ちゃん～」

「（利久人、まだこっちに気付いてないみたいだぜ。花苗、どうするか？）」

「（うーん、どうする？雪人君）」

「（こいつたんだろ・・・だから、僕にはかくれんばなんか向いてないって、言ったのに・・・）」

「（ねえ、雪人君、もうそろそろ可哀相になつてきちゃつたんだけど・・・）」

「（だな、もうそろそろ出て行こぜ）」

そうして、私と雪人君は、わざと利久人君に見つかりに行つたの。

その時

「うわーー！」

「あやーー！」

「兄ちゃんー花苗姉ちゃんー！」

突風が私と雪人君を飛ばしたの。

そして、雪人君は、頭を強打。私は、なんとか近くの木に掘まつて平氣だったの。

「だ・・・誰？」

利久人君の前に現れたのは、黒いマントを被つた青年だった。

『お前は・・・何かを壊したいか?』

青年は、利久人に問いかけた。まるで、利久人君の中にある破壊衝動を大きくするように。

「うわ・・・うわあああああああああああああああああああああああああ!!!!」

「利久人君!」

『邪魔者が入ったか・・・まあいい、こいつは、もう破壊人形だ。この事を知っている人間は、誰も居ない、居なくていいからな』

青年はそう言って消えた。私は怖かつた。
私は一目散に利久人君の所へ向かつた。

「利久人君! 大丈夫・・・?」

「だい・・・じょう・・・ぶ・・・。でも・・・頭が・・・痛い・・・
花苗・・・姉ちゃん・・・これ、持つてて・・・兄ちゃんに・・・
いつか・・・渡して・・・誰かが・・・そう・・・言つてる・・・
気が・・・」

そう言って、利久人君の手は崩れ落ちたの。

「利久人君! 利久人君! ! ! !」

そして、利久人君の姿は、青い光に包まれて消えた。
一瞬の出来事だった。

それ以来、雪人君も頭を打つた衝撃で利久人君の事を忘れて、まだ幼かつた雪良ちゃんは、利久人君の事を覚えていなかつた。

両親も、利久人君を、覚えていなかつた。

「何だよ・・・それ・・・。誰も、誰もそいつを知ってる奴が、居なくなつたのかよ！」

英樹は、その事に叫ぶ。

クキルも、悲しみを隠せない。

「確かに・・・それは・・・無いよ・・・」

「悲しいの・・・家族を忘れるのは・・・悲しいの・・・。忘れる方も、忘れられる方も・・・」

「これは、利久人君が消える直前に、私に渡したの。クロッカスの結晶」

クキルは、それはクロッカスの本来の力を開放する結晶だと気付いた。だが、彼は気になつた、何故、その雪人の弟が、この結晶を持つていたのか、偶然拾つたのだろうか？

当然、クキルには分からぬ。

「ただいま・・・」

雪人が帰ってきた。

「雪人！」

「雪人君！大丈夫なの？」

雪人は、疲労してる様だった。

「多分・・・クキル・・・其処に居たのか・・・忘歌ちゃんも・・・」

雪人は、誰かを背負つていた。

「この人つて・・・！」

「お姉ちゃん！」

雪人が背負つていたのは、忘歌の姉、哀歌の亡骸だった。

「死んでる・・・」

「ブレイクモンスターの器にされてたんだよ。死んだ後・・・」

雪人は言いたくなさそうに言つた。

「そんな・・・」

花苗は落胆する。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん・・・」

「葬儀を、頼む」

雪人は、そう言って仮眠室に行つた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あ～あ、まさか、クロッカーの弟について、知つてるのが居たとはね・・・」

アレクはつまらなそうに言つた。

「でも、そいつは自分の弟について、忘れてるんじゃない？」

コトコトは言つた。

その部屋の奥には、ベッドに少年が寝ている。

「あ、目が覚めたみたいね、ハロー。調子はどう?」

ベッドに寝ていた少年は、目を覚ます。
話しかけられた少年は

「別に・・・」

と返す。

「絡み辛い人ね・・・」

アレクは言つ。

「アレクは、もう少し絡みづらいたら？アレクは絡みやすすぎで、人間の社会に入るのも、すぐにしちゃうし」

コトトは、アレクに少し冷たい言葉を言つ。

「はいはい、ねえ、次のターゲットは？」

「この、まのみすき間野水木つて人間はどう？クロッカーの友達みたいだけど」

「いいね、それ。じゃあ、僕だけが行くよ、シカテは、まだ調整中だしね」

「分かった・・・」

そつ言つて、コトトの姿は消えた。

* * * * *

間野水木。雪人と花苗と英樹の友達だ。

彼もF・Tで働いている（今回の事件の時は休みだった）。

「大丈夫かな？雪人と英樹と花苗さん。この事件の場所つて・・・F・Tがある所だよね・・・？」

ニュースに不安を持ちつつも・・・水木はぼつつとしていた。

「少し心配だから・・・外に出ようかな・・・」

しばらくして、やはり三人の事が気になつた水木は、家を後にして、外に出た。

「寒つ」

今の季節は冬だ。寒くて当然だろう。
水木は、F・Tに行こうと、足を進める。
彼は、寒いのが嫌いだ。でも、外に出る時は出なればいけない為、
渋々出ている。

『ねえ、君が間野水木でしょ？』

少年・・・コトトが水木に話しかけた。

「そうだけど……誰？」

『ちよつと良い?』

そう言つて、コトトは突然水木の頭に手をかざした。その時、周囲が黒くなり始め、水木の周りを囲む。

『さあ、破壊人形になれ』

11

危険を察知した英樹は、雪人に視線を送った。

「分かっただ。 薔さん、少し留守にします」

「え？ じゃ、じゃあ、これ、持つて行って！」

花苗は、雪人に先程の結晶を渡した。

「・・・分かつた、クキル、行こう」

「分かつた」

「俺も行く」

「英樹！？」

英樹の意外な申し出に、クキルと雪人は驚いた。

「長い付き合いだらう、俺もサポートするから、な

「・・・ああ、分かつた、薔さん、忘歌ちゃんお願ひします」

「分かりました・・・忘歌ちゃん、私と一緒に待つの、良い？？」

「うんー。」

そうして、三人はF・Tを後にした。

「何だよこれ・・・」

「どうしたんだ？ 英樹」

その場所に付いた途端、驚愕の表情を見せる英樹に、雪人は尋ねる。

「あれから、水木の気配がしやがる」

「アガルー？」

「雪人と英樹の知り合い？」

クキルは尋ねる。

「知り合いも何も、同じ仕事仲間だ。まさか、あいつもブレイクモンスターの器にさせられるとはな……」

英樹は唸る。

その時

「英樹！これ！」

「うむ、されば……」

クキルが英樹に時計のような物を渡す。

「英樹は、それに適合してゐ！」

「そうか……雪人、行くぞ」

「ああ」

クロッカーと・・・新たなライダー、レナッカー。

二人は、クロックベルトを腰に巻き、変身した。

「「変身！-！」」

続く

6話「過去、真実、新たな仮面ライダー」（後書き）

ララ「いや、まさか英樹君がレナッカーだつたとは」

ルル「ちなみに、名前の由来」

下樹雪人・・・特になし

薔花苗・・・花屋を経営してるから花関連の名前

桜木英樹・・・春をモチーフにしたキャラクター。春の花といえば
桜。エイプリル

えい 英 英樹。

間野水木・・・夏をモチーフにしたキャラ。サマー サマー まさ
まさの 真野 間野。夏といえばプール 水 水木

クロッカー クロッカスと時計 クロック

レナッカー わすれなぐさと時計 クロック

ララ「主人公の由来」

7話「新感覚、初戦闘、水木の破壊衝動」（前書き）

カズマ「今日は短めです」
シンジ「作者曰くネタと時間が無いそいつだ」

7話「新感覚、初戦闘、水木の破壊衝動」

「これが・・・レナツカー・・・。仮面ライダーの力か・・・」

英樹は、感心しながら自分の体を見る。

雪人も、英樹が変身できたのは意外だった様で、それをまじまじと見つめていた。

二人がそうしている間にも、ブレイクモンスターは迫つてくる。それに気付いたクキルは、一人にそれを告げる。

「はいはい！感心するのは後で！今は水木って人を助けなきゃなんでしょう！」

「ああ、分かつた」

「うん」

クキルの言葉に、二人は反応し、ブレイクモンスターに向かつて行った。

まず、英樹はブレイクモンスターの足を得意の回し蹴りで蹴つて体制を崩させ、その後ろから雪人が武器、クロツクブレードで刺す。だが、ブレイクモンスターは後ろに居る雪人を殴り飛ばした。

「ぐああっ！」

「雪人！ぐつ・・・」

雪人が飛ばされ、英樹は助けに行こうとするも、ブレイクモンスターが立ちはだかる。

英樹は、仕方なく応戦する事となつた。

「どうすれば良いんだ！」

英樹は、どうしようもなくクキルに叫びながら尋ねる。
クキルは、英樹の言葉に、少し悩む。

「ええ・・・・・・・・」

「早くしてくれー！あつー！」

クキルが悩む横で、英樹は戦う。だが、今は英樹に武器が無い為、
何も出来ない。格闘戦しかないので。

雪人に助けを求めるが、生憎彼は氣絶している。変身も解けてい
るので、無防備だ。

その時、クキルがやつと言葉を発した。

「ああ！」

「クキル！何か思いついたか！」

英樹は、クキルが何か思いついた事に気付き、早速尋ねる。

「うん！英樹の力を使えば良い話だよー！」

「ああー！」

クキルの言葉に、英樹は納得する。それにしても、英樹が一番に思
いついたであろうが・・・。

「なら、早速使うぜ……はあああああ……」

英樹は、手に力を集中させ、気流を発生させる。

そして、英樹はブレイクモンスターを見据え、ブレイクモンスターに向かつて手を振り上げる。

その時・・・ブレイクモンスターは宙に舞い上がった。

「えっと・・・そういえば、前に雪人はこれを使ってたな。使ってみるか」

ブレイクモンスターを宙に浮かせたまま、英樹はクロックベルトについてる何かを捜索し始める。

そして、英樹は何かを見つけたようだ。

「あ！」

英樹は、ボウガンを見つけたのだ。先には、赤い薔薇の結晶が付いている。

英樹は、急いでボウガンの先をブレイクモンスターに構える。

「よし・・・！発射！」

ブレイクモンスター目掛けて放たれた攻撃は、ブレイクモンスターに当たり、爆発した。

その後には、雪人と英樹、二人の友人である、水木が倒れていた。

「ふう・・・ありがとな、クキル」

英樹は、変身を解いて、クキルに言った。

クキルは、呆れながらも英樹に言った。

「いや・・・自分の力を使うつて気付けなかつた英樹も英樹だけどね・・・」

「ははは・・・」

英樹は、水木と雪人を抱えて、花苗の居るF・Tに向かつた。クキルは、男性二人を軽々と抱える英樹を見て、呆然と呟いた。

「英樹つて・・・一体・・・」

もう分かつてゐるつもりなのだが、クキルは少々英樹が何者なのか気になつてくる。

続く

8話「忘れ事、焼却、思い出の箱」（前書き）

雪人「前回の仮面ライダークロッカーは……えっと……」

忘歌「水木が助けられたの！」

クキル「英樹つて……怪力なんだね……」

雪人「え？え？」

8話「忘れ事、焼却、思い出の箱」

「ふう…」

先程の戦いの後、英樹は氣絶している雪人と水木を背負つてクキルと共に花苗と忘歌の待つているF・Tに行つていた。

「英樹つて…力もちなんだねえ…」

クキルは成人男性一人（と言つても2人共平均よりは小さい方なのが）を抱えている英樹に向かつて言つ。

「まあな。生まれ持つた能力と共に怪力も授かつちまつたかもな」

英樹はクキルの言葉に笑顔でおどけて言つ。

「何か…ごめん」

クキルは、生まれ持つた能力の影響という言葉を聞いて何か悪い事を聞いた気分になつて、思わず謝つていた。

「良いんだよ。俺ももう慣れちまつたし。それにな、雪人は俺の力を間近で見てさ、俺がアイツを突き放した時、なんて言つたと思うか？」

英樹の言葉に、クキルは考えて考えて「分からぬ」と言つた。クキルの返事を聞いた英樹は、こう言つた。

「あいつが言つた言葉はな『神様はきっと、英樹にその能力で皆を

幸せにしてほしんだよ。なら、その能力でしか出来ない事を英樹がすれば良いんじゃないのかな』ってさ。あいつ結構天然なんだよな…純粋でさ、人より観点が違つんだよな…。それが雪人らしさなんだよ』

英樹の言葉は、とてもクキルには分かつた。

突然変身してと言われて変身して少し驚くくらいだし、生活危ないのに身元の分からないクキルを家に迎えたり…。彼の行動は普通の人間には出来ない。ただの単純な馬鹿なのかもしれないが、彼はとても優しい人間だ。

クキルは、今までの雪人の行動で気になつた事を英樹に話してみる事とした。

「そういえばさ、英樹。今までの雪人の行動で気になつた事があるんだけど…」

「何だ?」

クキルの言葉に英樹は返事を返す。

「あのさ…雪人が最初に僕が英樹を見た時に中学の知り合いつて言ったんだけど…英樹つて、小学生の時から雪人と知り合いなんだよね?」

「ああ…雪人は、記憶が曖昧になつてきてるんだ。雪良が死んだ時期も、本当はクリスマスだつたんだが、雪人は春だつたと勘違いしている。春に死んだのは花苗の弟なのに…」

「花苗の弟?」

初めて知つた事に、クキルは頭に疑問符を浮かべる。

「ああ、花苗にも弟が居たんだ。雪良と同い年の列花つていう弟が
な。ソイツも病弱でさ、俺達が高校に入学する前の春に死んだんだ
…」

「結構、皆複雑な事情があるんだね…」

英樹の言葉にクキルはそう呟く。英樹は超能力保持者。雪人は妹を
亡くし、弟は行方不明（弟の事は覚えてない）。花苗は弟を亡くし
ている。そんな話を聞けば誰だつてそう思うだろ。

「で、話に戻るけどさ雪人は恐らく…花苗のしてた話、雪人の弟の
利久人が居なくなつた時に頭を強打したつて言つてただろ、その
影響かもしれないんだよ。雪人が記憶を失くしやすいのはさ

「…」

それつきり英樹とクキルは黙つていた。

何を話せば良いのか分からないし、何を話しても雪人の事情や記憶
能力の話になつてしまふ気がしたからだ。

黙つて歩いて、F・Tについた。

「英樹君。クキル君。おかえり…つてどうしたの！？」

「雪人！」

花苗と忘歌は氣絶している雪人と水木を見て驚いて、慌てて仮眠室
に連れて行つた。

「で、どうしたの？水木君まで…あれの餌食になつたわけ？」

花苗は英樹とクキルにそう言つた。その表情は悲しそうだった。クキルは一瞬話すのを躊躇つたが、それを話す事にした。

「ああ…。そして、俺もこれを受け取つたんだ」

そう言つて英樹が出したのは勿忘草の模様の彫られた時計だつた。花苗はそれを見て「成る程ね…」と呟いた。忘歌も英樹が仮面ライダーになつた事が分かつたみたいだ。

「それにして…見境無いな…。まさか死んだ人間とかも使われるなんてな…」

英樹の言葉に、返事をする者が居た。

「もしかしたら…俺の知り合いばっか狙つてんのかもな…」

「雪人！まだ寝てなきや！」

「雪人君！」

雪人が仮眠室から出てきていたのだ。

それを見たクキルと花苗は雪人のもとへ駆け付けた。

「あれ？利久人…？花苗…」

そう言つて、雪人はまた倒れた。

「雪人君！雪人君！」

「駄目だ… また気絶してる…」

花苗が倒れた雪人を揺さぶるも、彼は起きない。英樹は、雪人が気絶している事に気付き、彼をまた仮眠室へ連れて行つた。

「英樹君。有り難うね」

「いや、良いんだ… だが、さつき雪人が…」

「うん。利久人って言つたね。クキル君の事をそう呼んだね…」

英樹と花苗にとって少々疑問なのは先程の雪人の言葉… クキルを見て利久人と呼んだのだ。

「僕が… 利久人？」

「ううん、それは無い筈。利久人君は今22歳のはずよ。こんな小さい筈が…」

花苗は其処まで言つて言葉を詰ませた。

もしも、あの時のまま利久人が生きていたならば…。

利久人の存在を覚えている花苗も、利久人の容姿までは覚えてない為、似ているかどうかもあやふやだ。

だが… なら、何故先程雪人はクキルを利久人と呼んだのだろうか？ 疑問は積もるばかりだった。

「僕は… 何なの？」

クキルは、自分が何者なのか。其処が気になつて仕方なかつた。もしも、雪人の弟だつたら？もしも、何でも無い物だつたら？

もつと、知らなくてはならない。自分の事を、雪人の事を、全ての事を。

記憶の無いクキルには、そう考えるしかなかつた。

続く

8話「忘れ事、焼却、思い出の箱」（後書き）

何か…フラグが浮上しました…。

剣崎「次回予告だウエーイ！」

城戸「あれー俺の知つてる剣崎さんつてこんなだつたっけー」

乾「知らん。とりあえず、次回予告か…」

剣崎「次回は忘歌が活躍するウエーイ！」

天道（壊れたな…剣崎…）

乾「…で、利久人つて、結局何なんだ？」

城戸「いやいやいや…今からそれが明らかになつていくんだろ」

剣崎「でもさ、こんな序盤で明らかにして良いのか？」

全員「…………」

城戸「作者！もひとつ細かい話！」「んな序盤で全部明らかにしたら駄目だ！」

剣崎「作者、まあがんばつえーい」

城戸「本当に大丈夫か剣崎さん！？」

9話「歌、過去、音の無い夢」（前書き）

忘歌「今日は私が活躍するよー。」

雪人「音の無い夢…」

9話「歌、過去、音の無い夢」

「僕は…僕はあつ…！」

「クキル！」

クキルが突然苦しみました。

恐らく自分自身の過去を思い出そうとしていたのだろう。

英樹は咄嗟にクキルの肩に手を置く。

「利久人君つて…何だつたんだろ？…。雪人のさつきの言葉つて…」

花苗かなえも利久人りくじんという存在について思い出そうとする。

誰にも忘れ去られた存在。花苗以外は居た事さえ花苗の聞く事でしかその存在が居たと思う人物も居ない。

そんな中、忘歌ぼうかには何が何だか分からなかつた。

「ねえ、何なの？その利久人つていう人。雪人も、何かあつたの？ねえ教えて…」

忘歌は苦しんでいるクキルと思い返そうとしている花苗と二人を見ている事しか出来ない英樹を順番に見渡す。

「…忘歌、俺達にも分からないんだ…何が何だか…分からないんだよ…」

英樹は遂に耐え切れず頭を搔き回す。忘歌はその場の全員の考えが読めそうで怖かった。

「…おはよつ…つていう雰囲気じゃないね」

水木が起きて來た。水木はその場の空氣が分かつたのか、あえて静かに近くの椅子に座つた。

水木が來た事に氣付いたクキルは頭を抑えていた手を離して上を向く。

「水木さん…ですよね…？」

クキルの表情は何とも言えない、固まつた表情だつた。それを見た水木は少々驚きながらも、クキルに挨拶する。

「うん、 そうだよ」

「アハハ…誰か教えて…教えて…僕は何?何なの?」

水木が答えると、クキルは壊れた笑みをしながらその場に座り込む。完全に壊れてしまつてはいる。

雪人も眠つてはいる状態なので、彼に確認出来ない。それに、もしかしたら彼は忘れてはいるのかも知れない。

水木はクキルを見て英樹に尋ねる。

「あの子… 一体どうしたの?」

「壊れるんだよ…自分が何者なのかとか自分は何で雪人と出会つたのか…知らない事が沢山ありすぎて混乱してるんだよ…」

英樹の言葉は的確であろう。

そんな状態のクキルを見た忘歌はこう言った。少々言葉が震えていた様だつた。

「昔の忘歌みたい…忘歌も、お姉ちゃんが居なくなつた事について逃げていた。全部から。何もかもから…今のクキル…そんな感じなの…」

震えている忘歌を、花苗は後ろから抱ぐ。

花苗も、まだ答えは出でない。だが答えが出るのを焦つては駄目。それで考えるのを止めたのだ。

「大丈夫…大丈夫だから…」

「クキルう…忘歌みたいにならないで…」

そう叫んだ忘歌の周りを…いや、この部屋一帯を囲むくらいの光が発生した。

花苗や英樹、そしてそれを発生させた忘歌でさえもそれが分からなかつた。

「何よこれ…」

「まさか…忘歌、お前も…」

「何なの…？これは…」

その光はだんだんと収まつて来て、忘歌は真つ先にクキルの方を見る。

クキルは倒れていた。忘歌はクキルのもとに寄つた。

「ねえ、忘歌…クキルは…」

「寝てるだけ。音の無い夢の中にな…入れたの。忘れた記憶の箱…
これは意識が目覚めた時には戻ってるの…一つ、整理しましょ？」

花苗は忘歌にクキルがどうなったか尋ねる。

答えた忘歌の口調は何だか大人びている。彼女がこんな事を知っているのだろうか？

一瞬で忘歌は別人になってしまったような感じだ。

「此処は…」

クキルは、真っ白な空間に居た。
周りには何も無い。無の空間だった。

「ねえ、教えてよ…僕は何なの？」

クキルは何処かに手を伸ばして何かに問いかける。
でも手は空を切るだけで何も無いし、声は音の無い空間に響くだけ。

「何だよ…何だよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお…」

「あ、おはよ…つてどうしたの？クキルも倒れてるし」

雪人が起きて来た。クキルと言っている辺り、先程の事は覚えてないだろう。

「雪人君…」

花苗は彼が自分の事を名前で呼んでくれない理由が分かった。
昔は呼んでくれていたのに…何故今は呼んでくれないのか…それが
分かった。

「「めん、「めんね…」

花苗は何となく謝らなければいけない気になつて謝る。
雪人には何も分からなかつた。

続く

9話「歌、過去、音の無い夢」（後書き）

今日は戦闘無かつたですね。っていうか戦闘少ないな私の…
さて、音の無い夢って何でしょうかねww
タイトルが分からなくなつてきましたww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0459z/>

仮面ライダークロッカー～始まりの物語～

2012年1月5日20時48分発行